

主体的に学ぶ力の育成と 小学校外国語教育の課題

第1回

外国語教育における 「探究的な学び」と自己調整力

早川 優子

国立教育政策研究所教育
課程研究センター研究開発
部 教育課程調査官。
文部科学省初等中等教育
局教育課程課外国語教育
推進室教科調査官。



今、改めて考える「主体的、対話的で深い学び」

「自由進度学習」、「教え込まない授業」、「他者参照」などの言葉をよく耳にするようになりました。昨年12月25日に文部科学大臣が中央教育審議会に諮問し、次期学習指導要領に向けた検討が進んでいます。そこでは、顕在化している課題として、主体的に学びに向かうことができない子どもの存在が挙げられています。また、学校現場ではデジタル学習基盤が整備され、その積極的な活用が推進されているところです。

このような背景から、指導観や学習観、授業のあり方が変わってきたということなのでしょう。

今、教育現場で起きている変化と文部科学省が挙げている課題について、早川先生に詳しくお話を伺いました。全3回にわたってお届けします。

第1回のテーマは「外国語教育における『探究的な学び』と自己調整力」です。

「探究的な学び」から 外国語教育の 特質を捉え直す

今次の小学校学習指導要領(以下、学習指導要領とする)は、「主体的・対話的で深い学び」を通じて授業改善を図り、児童の資質・能力を育成することを求めています。「主体的・対話的で深い学び」を通じた資質・能力の育成を、誰一人取り残さず全ての児童に実現できるようにしていくための具体的な改善の視点として「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が挙げられます。児童一人ひとりに合わせた学習環境の調整や、教材へのアクセスを容易にし、「個別最適な学び」を一層充実しやすくする大切な学習基盤の一つが、1人1台の端末やクラウド環境、デジタル教科書・教材などのさまざまなICT環境です。(以下「デジタル学習基盤」と記す) こうしたデジタル学習基盤の整備が進む中で、児童が主体的に学ぶ姿を支える環境が整い、先生方の間でも「探求的な学び」への関心が高まってきていることを感じます。「自由進度学習」や「複線型授業」などの言葉がよく聞かれるのは、その表れでしょう。

これらの学習形態を取り入れた授業では、教師が児童に学びを委ね、児童が自分の端末を使って学習者用デジタル教科書の動画を視聴したり、友だちと意見交換をしたりして、学びを自己調整しながら進めている様子が見られます。「こうした学習形態を取り入れてみたい」と考える先生方もいらっしゃると思います。ここで改めて考えたいのが、「探究的な学び」を通して、児童の学びが深まっているかどうかということです。

一般的に「探究的な学び」では、児童自身が学習内容を実社会、実生活に照らし合わせて課題を設定し、その解決に向けて情報収集をしたり、他者と協力したりしながら学びを深めていきます。小学校の外国語では、児童が自らの目的をもって相手に英語で伝えたい課題を



設定し、相手に伝わるように試行錯誤しながら伝え方を考えていくことで、学びを深めていくことが考えられます。

児童が探究的に 学ぶ姿を支える 外国語の授業づくり

外国語の授業において、児童が探究的に学ぶ姿を育んでいくためには、単元などの内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るようにすることが重要です。その際、以下に示した、外国語教育における学習過程を踏まえ、児童が言語活動の目的や場面、状況等を自分ごととして捉え、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動で活用したりしながら、「思考力、判断力、表現力等」を高めていくことが大切です。

- ①児童が設定されたコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を理解する。
- ②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる。
- ③目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う。
- ④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う。(改行、句点は開隆堂)

出典：『小学校学習指導要領(平成29年告示)
解説 外国語活動・外国語編』

学びを調整するための 「中間指導」と「振り返り」

学習指導要領では、外国語の目標に「言語活動を通して（中略）資質・能力を育成することを目指す」と示しています。これを「本物のコミュニケーションではない練習は避けるべき」と読み取られることがあります。私は、場面設定があり、その目的に向かうための練習は「してはならないもの」ではなく、タイミング、導入の仕方を間違えずに行うことが大事だと考えています。

たとえば、誕生日について話す場面が設定されていたとします。児童が「プレゼントにほしいものを言いたいな、でもその言い方がわからないな」と思ったとき、それこそが練習のタイミングです。このとき先生からその言い方を教えられたら、言えるようになるまで何度も練習するでしょう。これはただの反復練習ではなく、目的を達成するための意味ある練習です。自分の課題に気づき、学びを調整することそのものといえます。

児童が学びを自己調整するためには、児童も教師もタイミングを逃さず課題を認知し、それを共有することが大切です。だから「中間指導」と「振り返り」が重視されているわけです。この二つは従来から先生方が指導において重視されていることですが、改めてその意味、目的を確認していただけたらと思います。

教科等が目指す 資質・能力の 育成に向けて

繰り返しになりますが、「探求的な学び」の視点から授業改善を進める方法は教科等によって異なります。先ほど述べたように、小学校の外国語では、児童が自らの目的をもって相手に



英語で伝えたい課題を設定し、相手に伝わるように試行錯誤しながら伝え方を考えていくことで、学びを深めていくことが考えられます。具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちを伝えるために「思考力、判断力、表現力等」を発揮しながら、同時にその下支えとなる「知識・技能」を身につけるとともに、「学びに向かう力、人間性等」を養っていきます。ひっくり返せば、これらの3つの資質・能力が育成されないことには「外国語」の本質にはたどり着けず、生涯にわたって英語を学ぶ児童生徒の育成はなし得ないといえるでしょう。どのような学習形態であっても、学習環境が変わっても、大事なことは、その教科等で目指す資質・能力の育成ができるのかに尽きます。

「見方・考え方」を働かせ、
深い学びに
つなげることが重要です。



引用・参考文献

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説
外国語活動・外国語編



「初等中等教育における教育課程の
基準等の在り方について(諮問)」

令和6年12月25日 中央教育審議会



学びラボでは、全国の小・中・高等学校の先生や教育委員会関係者に向けて、
授業実践や教材にまつわるコラムなど授業で役立つ情報発信をしています。



Junior Sunshine Letter Vol. 7



早川先生の過去の記事は
当社HPで読むことができます。



特別号

非売品

2025年8月8日発行
編集兼発行人 岩塚太郎
発行所 開隆堂出版株式会社
<https://www.kairyudo.co.jp/>

※本資料は一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03-5684-6111

北海道支社 〒060-0042 札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階
名古屋支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-15-18 オフィスサンナゴヤ9階
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階

☎011-231-0403
☎022-742-1213
☎052-908-5190
☎06-6531-5782
☎092-733-0174